沖縄の原風景に関する基礎的考察

琉球大学工学部○上 間　清

1.まえがき

第三次全国総合開発計画（昭和51年）の策定以来，国民と時代のニーズを背景として「国民福祉の充実」「国民生活の質的充実」「豊かな国民生活の形成」など，国民の身近な生活領域に国の政策の重点が移動されはじめ，この政策は量的質的内容を高めつつ，その後の諸計画に引き継がれ今日の，国民の一人一人が心の豊かさを感じとることのできる「ゆとり社会の建設」（新道路長期整備計画-政府）の計画理念に至っている。

この様な計画思潮は土木計画学研究の分野にも多くの課題を提示し，都市・道路・河川・港湾等に一層の機能・効率・安全性の向上という継続的課題とともに，アメニティー（特に景観）の問題に大きな関心が示され，関連の多くの研究成果，出版物（訳書，専門図書），設計指針等[1]が蓄積整備されて来た。

今や土木施設や構造物の計画や設計において，景観検討は必須のステップとなった感があり，末端の地方自治体の土木行政においても構造物・施設の個別の景観検討が広範囲に実施されるなか，法令（条例），景観指針等の整備・検討も大きく進展して来ている。

この過程で「地域開発の個性化」という時代の計画思潮を反映して，景観の計画設計にも地域特性の反映のあり方が問われている。しかしながら「景観の個性化」の計画・設計手法は単純ではなく，そのためには，地域景観資源の収集整理，分析や造景史的考察，また地域の人々の景観認識や評価等，種々の事項の検討が待たれている状況にある。

沖縄県においても昨今，土木施設・構造物計画における景観検討は極めて活発に進展している状況にあるが（資料発表時），上述した「景観の個性化」にかかわる課題は同様である。

本考察は上述の課題認識のもと，アメニティーや景観論議の際話題となることの多い沖縄の「原風景」について，その意義，調査資源，類別及び特性について基礎的考察を試みるものである。

2.原風景の意義

風景に関連した言葉は実に多い。中国の瀟湘(しょうしょう)八景(注)にちなんだわが国の各地の八景（近江八景，金沢八景，球陽八景[2]など），また，風景の表題としての４字説明句「山紫水明」「白砂青松」「泉月夜月」「臨海潮聲」「長虹秋聲」など，人々の特殊な生活体験に根ざす「心象風景」，語尾にスケープ(－scape)のつく用語のいろいろ－Landscape，Seascape，Nightscape，Soundscape等－がある。

注）中国湖南省洞庭湖の八景，わが国語八景の情報源

原風景は時間軸をさかのぼる歴史性を有する意味で上述したような静的な風景とは異なった意味を有している。「原」はものごとの根源を意味するから，「原風景」は人々が共通に認識しうる個性ある地域の「原型」的風景と考えることができよう。しかしながら，原型といえ，これと連続する風景が現存するとは限らないし，現存するにしても，古今不易の遠景の構成要素（山景・海景等自然系）であったり，断片的な至近近景の要素(旧橋，河川堤防，墳墓等)であったりであるのが一般の景観状況である。したがって「原風景」と規定されるものは，現存景の存否を問わず，景観体験のほか情報として伝えられた絵画，写真，伝承，文章，詩歌等によって形成され，人々に共通認識されている原型的風景と考えることが妥当のように考えられる。

3.沖縄地域の原風景調査資源

「風土を讃え育てんとする風景論は，むしろ思想上も，また工学技術，行政技術の点からも，地域主義に行きつくべき性格をもっている」[3]とされる以上，地域の原風景をさぐり，その特質を検討することは，たとえその実現が大規模な都市開発・整備が必須のニーズである今日及び近未来の状況下で「神話的」であったにしても，古典その他のソースに原風景を求め，その特性を考察しておくことは今後の地域景観計画・設計のあり方を考えの上で看過されてはならないと考える。原風景も含めた地域景観の特性に関する分析考察を欠くところに，ときにみられる景観設計対応における具象の弊が生じる素地があると考えられる。

さて具体的に地域の原風景を探るにあたって，どのような調査・視点，あるいは資源があるであろうか。沖縄の場合次のような点が考えられる。

(1)復元も含めて現存する旧い遺構で地域の造景要素として，人々にそのアイデンティティーが認められている，あるいは文化財等として公的認知を得ている構造物や建造物-（例）グスク，亀甲墓，石造橋，石門，池等の示す風景。

(2)地域から他者へ発する情報として絵はがきにみる景観で，人々の共感を得ている風景あるいはフォルム。-（例）山岳，海岸，島嶼，民族（衣装，民具），芸能，地舟，遺構等の示す風景，かたち。

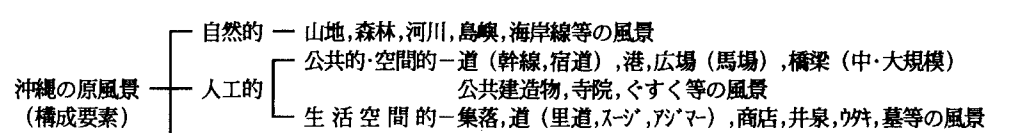
(3)地域の歴史，民族，文化史関連の書籍，写真集，画集，その他資料等に繰り返し掲載され，人々に親しまれている風景，もののかたち。-（例）球陽八景，港，集落，拝所，交通機関（地船，軽便鉄道，客馬車，軌道馬車），市場の風景など。

(4)人々に膾炙(かいしゃ)されている琉歌[4]（和歌に対置される琉球の詩歌，一般に8・8・8・6の音律を有する）の題材となり，イメージされている地域の風景。-（例）

島々,港,道,船,山岳,ぐすく,などのイメージ。

(5)多くの人々が幼少の頃から青年期にかけて体験した日常生活の場の心象風景。-(例)田畑,山地,井泉,マチヤ,サーター屋,墓,石垣,赤ガワラ屋根,シーサー,スージグワー,アジマー等。

以上のような原風景資源が指摘できる。しかし,具体的内容において重複する細部項目も多く,したがって,これを景観論的な類別と考えることは不適当であり,これについては重複性の回避,明示的であることを期待して以下のように考えたい。



さて,上記に示したものは原風景の構成要素であって,必ずしも原風景ではない。原風景は,ときに提示した細部の事項のいづれか単独で成り立つ場合があるにしても,(例・○○ぐすく,○○橋)一般には,これらの構成要素が組み合わされた全体系であると理解すべきであると考える。例えば,沖縄の原風景として,特に異論はないと考えられる前出の球陽八景の各景(「泉月夜月」「臨海潮聲」「長虹秋霽」など計8景)は,海,山,家屋,月,寺院,石橋などから構成されているものである。先に現存景の存否を問わず,人々に共通認識されている原型的風景を原風景と考えることを述べたが,上記のように原風景の要素は多種多様であり,「認識」の範囲やレベルを考慮に入れると生活域別,年令別,時代別に多くの原風景の抽出が必要であろう。その中から共通項として指摘されるものが「地域の原風景」とすることが必要と思われ,広範な調査を待たねばならない。今後の課題である。

4.原風景の特性

前述のように厳密な意味での原風景を具体的に抽出することは容易でない。ここでは,前節の調査視点(3)から選びたした(20冊余の歴史,文化史,関連著書,写真集を調査)人々に親しまれ共感を得ている風景32例をもとに若干の特性を考察したい。これらについて対応の現景調査資料を加えて,新旧ﾍﾟｱﾃｽﾄ,SDﾃｽﾄ,及び数量化分析を実施した。主要な結果は次の通りである。(関連資料発表時)

(1)原風景・現景ペアテスト:新旧32対について12名の被験者に「好ましさ」の判断を求めた。32対中21対について原風景が好ましいという回答を得た。出現状況に関する検定結果は有意であることが示された。原風景・現在景比較において,人々は原風景に好ましさを感じていると考えられる。原風景あるいは現景が,ペアテストにおいて危険率5%で有意となったものには,前者8ｹｰｽ,後者5ｹｰｽあり風景の特徴として次のことが指摘できる。

・原風景(有意8景)- 水辺と石橋,石垣,石畳,琉球松,地舟と水辺,ｶﾜﾗ屋根,亀甲墓,のある風景

・現在景(有意5景)- 広中道路,都市建物風景,港と家屋群,農村集落建物群,のある風景

(2)原風景のイメージ:8対の新旧景について,29の形容詞項目に対するＳＤテストを行った。結果のｲﾒｰｼﾞﾌﾟﾛﾌｨｰﾙを作成した。原風景に対する形状が全体として整っており明快な判断があると考えられるのに対して,現在景に対しては判断がバラついている様子が示されている。原風景が評価されている要因には静けさ,雰囲気,さわやかさ上質,清潔,洗練,男性的等がみられる。

(3)景観視良否判断の主項目:新旧含め60ｻﾝﾌﾟﾙについて,緑の占有度,水辺の存在,構成要素の分布,材料の新旧,造形的特徴をｱｲﾃﾑとして数量化分析を試みた(Ｉ類)。この5要因で外的基準値の実測値・予測値は良く適合し,外的基準の要因間の重相関係数は0.8が示された。

5.あとがき

以上沖縄地域の原風景について基礎的考察を行い,原風景の調査視点,類別を試み,また,原風景・現在景のﾍﾟｱﾃｽﾄ,SDﾃｽﾄ及び数量化分析を行い,原風景の好ましさの風景構成要素要因,ｲﾒｰｼﾞの特徴,等について考察した。しかしながら「地域の人々に共感される原型的風景」としての沖縄原風景を抽出し,景観計画設計に役立てるためには,広範な調査・分析をまつ課題が少なくない。

参考文献

1)たとえば土木学会「景観論」(彰国社,1977),「街路の景観設計」(1985)他設計書,建設省「道路景観整備ﾏﾆｭｱﾙ(案)」,篠原修「土木景観計画」(1982)など.

2)周煌,「球陽八景」,琉球国表略巻1所収,1757, このほか沖縄関係の八景には「琉球八景」「中山八景」「円覚寺八景」「東苑八景」「首里八景」などがある.

3)中村良夫,風景学入門,中央公論社, 1985,p.232.

4)島袋盛敏,琉歌大観,1978,など多数あり.